

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	小林多喜二『工場細胞』と《フォードの虐殺》：二〇世紀ミドルクラスの形成と没落
Author(s)	尾西, 康充
Citation	近代文学試論 , 57 : 13 - 20
Issue Date	2019-12-25
DOI	
Self DOI	10.15027/50487
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050487
Right	
Relation	



小林多喜二『工場細胞』と『フォードの虐殺』

— 二〇世紀ミドルクラスの形成と没落 —

尾西康充

1 「工場細胞」について

「改造」一九三〇年四月〜六月に掲載された小林多喜二の「工場細胞」は、一九二七年三月の昭和金融恐慌、二九年一〇月のウォール街の株価大暴落とそれに続く世界恐慌によって、国内外の経済が破綻に瀕していた状況下で書かれた作品である。原稿用紙二四〇枚には、工場細胞と日本共産党が結びついた三・一五事件以後の日本の左翼運動が描かれていた。企業の集中による一産業資本家の没落を背景に、工場委員会の自主化を目指した闘争が作品のテーマとされている。当時、立憲民政党の浜口雄幸内閣は、幣原喜重郎外務大臣による対米協調外交、井上準之助大蔵大臣によるデフレ政策、重要産業統制法による独占資本本位の重化学工業化や産業合理化、金解禁などの政策を掲げていた。国際競争力を高めようとしてこれら一連の政策を実施したものの、金解禁からわずか半年で七パーセントに達した物価の暴落と国際収支の悪化、さらに鉱業、建設業および製造業の生産の減少によって、中小企業の倒産が続出することになった。都市には大量の失業者が生み出され、市民生活は破綻に瀕した。他方、農産物価格の暴落による農民の窮乏は、農村地帯を悲惨な状況におちいらせた。政府は

恐慌対策として産業合理化を強行し、カルテルの拡大強化を進めたが、独占資本の巨大化は社会的矛盾を露呈させ、労働運動や農民運動を激化させることになった。

このような社会的矛盾を作品に描きだそうと、多喜二は北海製罐倉庫株式会社の、小樽にあった製罐工場取材して「工場細胞」を創作した。北海製罐は、北洋漁業を独占していた三菱系の日魯漁業の子会社で、従業員八〇〇人の近代的な工場であった。年間一億個生産される罐は、カムチャツカの缶詰工場や蟹工船で使用されていた。「改造」の編集者佐藤績に宛てた手紙のなかで、多喜二は「工場細胞」の基本コンセプトを伝えていた。多喜二によれば、今回の作品は、最も資本主義化された近代の工場を描き出すことを目的としている。工場をテーマにした従来の作品の多くは、まだ露骨な、残酷な搾取をおこなう前近代的な鉄工所式の工場しか描けていないが、「工場細胞」ではこれまでどの作家も取り扱わなかったような、最新のテクノロジ―やアメリカ式の労務管理などが導入されて近代化された工場を取り上げたい。産業合理化が進む工場の問題を作品のテーマとし、資本に立ち向かう工場細胞の活動や工場新聞の潜入、工場委員会の自主化、共産党員の工場進出などを作品に盛り込みたい、としたのである（一九二

九年一月三〇日・三月三日付書簡)。

2 「Yのフォード」だという自己錯覚の阿片」

では、「工場細胞」に描かれた内容を紹介してみよう。Y市にある「H・S製罐会社」の「H・S工場」では、労働組合と会社とが職工たちの獲得をめぐる熾烈に争っている。しかし実際、Y市の「合同労働組合」は、これまで「大工場」や「重工業の工場」には「全然手がついていなかった」、つまり「工場に根を持っていなかった」のである。組合の実勢力をなしているのは、「職場から離れている」港の運輸労働者たちで、Y市で「労働者」といえば浜人足、彼らは「動物線以下の労働を強いられている半自由労働者」や仲仕を指していた。しかも「朝鮮人がその三割をしめている」とされた。今、日韓関係に暗い影を落としている徴用工問題、徴用工そのものは第二次世界大戦中の問題とされているが、多喜二はそれにつながっていく、朝鮮半島を植民地化した問題に触れているのである。彼ら労働者たちは、普段から「親方制度」や「現場制度」「歩合制度」など、「色々な小分立や封建的な苛酷な搾取をうけ、頭をはねられ、追いつめられた生活」をしていたので、「何かのキツカケ」があればストライキを起こしていたと描写されている。

「H・S工場」の職工は、市内に溢れている失業労働者や半自由労働者から「羨望」の眼差しでみられ、「俺らはお前たちの仲間とは異(ちが)うんだぞ」という態度を示していた。「どれも惨めな生活」を送っている彼らとは同じ労働者ではないと感じていたのである。「H・S工

場」の職工は、Y市の「合同労働組合」には「一人も入っていないと云ってよかった」という状況であった。「H・S工場」に勤めているといえば、それだけで近所への「誇り」にさえなっていたとされ、会社は彼らの優越感を煽って管理しようとしていたのである。

工場内で「合同労働組合」のピラが配られると、すぐに会社は対抗手段に出た。会社によれば、「我工場」は「Yノフォード」たる「名ニ恥シクナクナイ」充分の待遇を、勤務時間の面でも賃金の面でも実施している。労働組合のピラに「付和雷同」しないように「呉々モ申述ベテ置ク」と告示したのである。

小説のクライマックスでは、工場大会が開かれて決議文と要求書が提出される。労使対決の緊迫した状況になってもなお、専務は「自分が今迄長い間、職工たちに与えてきた「Yのフォード」としての、過分な温情はそう安々と崩されるものではない」と信じていた。専務は、採用人事においても職工の親や兄弟から選ぶという「工場の一大家族主義化」を考えていたからである。それは職工の間に「責任上の連繫」をつくと同時に、職工の家族に「恩恵」を与えることによってストライキ対策になっていた。会社の《温情主義 (paternalism)》とは、使用者と労働者との関係を、その利害が基本的に相対立する階級関係ではなく、使用者の温情と従業員の忠誠心にもとづく協調関係として説明し、労使関係の安定を図ろうとする労務管理を意味する。「産業の合理化」を計画している会社は、職工の反発を封じ込めるために、このような《温情主義》を重視したのだが、労働組合員の目からみれば、「Yのフォード」だという自己錯覚の阿片」を飲まされていたにすぎなかった。

「H・S工場」の労働者たちの「自己錯覚」は、自分たちが選ばれた者であるという優越感にもとづいていた。しかし工場長が「産業の合理化」を進めると、工場は新たな様相を示すようになった。生産力の強化のために分業化が進み、コンベヤーを完備させたことにより、「運搬工」や「下働人夫」が目立って減り、賃金の高い熟練工の人員数も整理された。熟練工と不熟練工との人数の差も賃金の差も大幅に減少すると同時に、女工が積極的に雇い入れられたのである。しかしここで、女性の就職の機会が拡大したと喜んでいてはならない。女工が増加することによって工場全般の賃金が低下したのみならず、工場長によれば「女を使うと、賃銀ばかりの点でなく、労働組合のような組織に入ることもなく、抵抗力が弱いから無理がきく」という状況になってしまっていたからである。

さらに、この「産業の合理化」は「企業の集中化」が真の狙いとされていた。収益性に富む大企業に市場を独占させ、その陰で甘い汁を吸おうとしていたのが銀行であったというのである。これこそ、レーニンが『帝国主義論』で指摘したところの、産業資本と銀行資本とが癒着した独占金融資本主義であった。多喜二は「工場細胞」のなかで、レーニンが「腐朽と停滞が支配する死滅しつつある資本主義」ととらえた独占資本の支配体制と収奪的体質を的確に、かつ読者に分かりやすく説明したのである。

3 フォーダイズム (Fordism) の出現

ところで、フォーダイズムとは、一九一〇年代にヘンリー・フォー

ドがベルトコンベヤーによる流れ作業方式を導入し、T型自動車の大量生産を開始したことから始まった。それまで一台製造するのに二四時間かかっていたのが、わずか九六分ですむようになったのである。高賃金と八時間労働制という当時としては画期的な労働条件で労働者を雇用し、一九一四年当時、一般の労働者の最低賃金が二ドルであったのを五ドルにまで引き上げた。労働者にとってテラー主義の原理にもとづく単純繰り返し作業は苦痛で、二年も働けば廃人同然になったといわれていたが、高賃金と短時間労働がその代償になった。彼らは価格の急低下——一九〇九年に九六〇ドル、一九一六年に三六〇ドル、二〇年代には二七五ドル——したT型車の購入者にもなった。「農民にも自動車を」というスローガンの下、フォードは一台につき二ドルしか利益を得ないという原価に近い価格で、一九二一年には八四万五〇〇〇台の自動車を売ったが、それは同じ年に販売された自動車総数の五五パーセントに相当する規模になった。

第二次世界大戦後に本格化する、大量生産・大量消費の持続的な拡大は、フォーダイズム的發展様式と呼ばれるようになった。創業者ヘンリー・フォードの基本理念は、賃金、動機を高めること——高賃金の支払いと低価格での販売によって購買力の増大をめざし、米國經濟の繁栄を結果としてもたらす——にあった。それは従来の利潤動機——賃金の引き下げと価格の引き上げを図る営利主義——とは対極にあるものとされたのである。

アメリカ社会史の研究者オリヴィエ・ザンズは、そのプロセスを『アメリカの世紀 それはいかにして創られたか?』のなかで、つぎのように説明した。

新しい産業の現実が、二〇世紀の早い時期に、半熟練労働者——フレデリック・ウインズロー・テイラーの「科学的管理」とヘンリー・フォードの組み立てライン方式との産物——を創出することにより、熟練および不熟練労働者の間にあった伝統的な区分を壊した。作業長はしだいに管理者側に組み込まれたが、半熟練労働者は数においてはアメリカの労働者階級を支配するようになり、それとともにニューディール時代には多数の労働者を組織化することが支持されるようになった。生き残った熟練労働者と職人とは中流階級の構成員となり、他方、比較的賃金の高い半熟練労働者もまた中流階級に入ることのぞむようになった。¹⁾

二〇世紀初頭のアメリカでは、熟練労働者および半熟練労働者の賃金が徐々に上昇することによって、彼らの大部分が中流階級に入ることがようになった。その結果、階級区分が著しくぼやけるといふ変化が生じた。ザンズによれば、その規模が大きくなり、生活水準が向上した中流階級は「アメリカの世紀」の「看板」となった。「労働者階級ではなく、中流階級が革命の寵児」であり、「中流階級の価値観の実現に務めることが、マルクス主義にたいするアメリカの対案」となったというのである。

「H・S工場」の場合、職工全体の賃金や待遇は低下しているのので、アメリカのように中流階級の創出には至らなかった。そもそも一九三〇年代の日本社会が階級社会であったことは明白な事実であった。しかし、「Yのフォード」という巧みに煽られた優越感と会社に対する

忠誠心、さらに製罐工場は「み国のため」に操業しているという愛国心を駆り立てることによって、「H・S工場」の職工は他の労働者との連帯が断絶させられていたのである。

フォードリズム時代のアメリカの中流階級は、ほとんどが白人アメリカ人で占められていた。彼らが中流の多数者のなかに継続的に統合されていったので、社会対立が現実化することは稀であったとされる。白人アメリカ人にとつての上昇的な社会流動性の型は同化のための装置であり、同時に安全弁でもあったのである。他の現代産業社会の市民たちが支持したような、階級闘争の論理に訴えるマルクス主義を、アメリカ人が好まなかったのは、アメリカ社会には中流階級への包摂のプロセスがすでに促進されていたからであった。ひとたび中流階級という「平均的アメリカ人」が社会で受け入れられるようになると、アメリカ人は「より平均的に振舞いたがるようになり、さらにまたどれくらいその虚構の人格とかけ離れているのかを測ろうと懸命になった」とされる。

しかしその一方、白人アメリカ人の熟練労働者は、「パンとバター」の組合主義、つまり自分たちの一層高い生活水準と次世代の社会的上昇の達成を優先した。その結果、彼らは、多くが東ヨーロッパから来たばかりの移民だったり、南部から来たアフリカ系アメリカ人だったりした不熟練労働者、すなわち自分たちの利益を損なうであろう労働者たちと、同盟を結ぶことには気が進まなかったとされる。労働者の相互協力という観念は、自分と同じ地位を持つ人びとの結束の域をこえるものではなく、白人アメリカ人の熟練労働者は、新たに大陸に到来した大量の不熟練労働者たちと連帯しようとは考えなかった。

公民権運動以前のアメリカでは、皮膚の色のちがいをこえてともに働くという意識はどこにもみられなかったのである。

ドイツの社会学者ヴェルナー・ゾンバルトは、一九〇六年の著書『アメリカに社会主義がないのはなぜか』のなかで、アメリカの労働者たちが社会主義に傾倒するには裕福すぎることを指摘した。彼らは心地の良い環境で暮らしている、抑圧的なまでに劣悪な住宅環境というものには縁がない、男女とも紳士淑女のように身なりを整えているために、自分たちと支配階級を隔てるギャップに外見上気づかない。高い生活水準がいつまでも変わらないと確信しているために、既存の社会秩序への不満が労働者の心のなかに宿らないのも不思議ではないとする。ゾンバルトは「すべての社会主義の理想も、ローストビーフとアップルパイの前では失敗に終わるのである」と指摘したのである。

「工場細胞」の森本たちは、『階級的自覚』を持って労使の闘いに臨み、「工場委員会」の自主化を獲得しようとした。彼らが闘ったのは、「H・S製罐会社」とどまらず、市民の自由と権利を圧殺しながら海外植民地支配を拡大しようとする帝国日本の独占資本主義、さらにはグローバルに展開しようとするアメリカ資本主義モデルでもあった。「工場細胞」には、「若い職工は帰るときには、ナツパ服を脱いで、金ボタンのついた襟の低い学生服と換えた。中年の職工や職長はワイシャツを着て、それにネクタイをしめた」とある。創業者ヘンリー・フォードも自伝『藁のハンドル』のなかで、アイルランドに自社工場を設立したとき、社員の暮らしぶりの変化にすぐに気づいたことを回想している。フォードによれば、「高賃金の支給は、従業員の家庭にすぐに影響を与えた。新入りの従業員の妻を注意して見て

いれば、それがすぐわかる。彼女たちは、いつも昼になると夫のために弁当を届けにやってくる。彼女たちは初めの数週間は、頭からショールをかぶってやってくる。ところがしばらくたつと、帽子をかぶって来るようになり、さらに数週間たてば、フロック・ドレスやスーツを着てくるようになる」という。²⁾

「工場細胞」のなかで、「Yのフォード」だという自己錯覚の阿片を飲まされた職工たちは、意識のうえで中流階級に包摂されようとしていた。労働組合に求められていたのは、彼らを幻覚から正気に戻らせ、社会的矛盾を直視させることであった。ミドルクラスの幻覚にまどわされず、工場労働者たちに階級闘争の現実を自覚させることが労働組合員たちの使命とされたのである。世界の至るところでミドルクラスの没落がみられ、社会不安が蔓延するなかで極右勢力の台頭が顕著になっている。この意味で多喜二の指摘は先駆的な意味を持っていたと考えられるのだが、実はミシガン州ディアボーンにあったフォード本社リバービュー工場でも、一九三二年三月に労働組合員の虐殺という大きな事件が発生していた。まさに多喜二の予感的中していたのである。

4 《フォードの虐殺》

一九二九年、アメリカでは、一パーセントの富裕層によって社会全体の可処分所得の一九パーセントが独占されていた。³⁾二一年にはそれが一四パーセントだったので、急速に貧富の格差が広がったことになる。同じ時期、機械化とスピードアップによって工業生産物は九一

パーセント増加したが、賃金労働者は二五パーセントしか増えなかった。フォードは一九二九年三月には一二万八〇〇〇名を雇用していたが、三一年八月には三万七〇〇〇名にまで削減した。GMやクライスラーも大量解雇をはじめたので、三三年までにミシガン州全体の失業率は四六パーセントに達した。賃金も低下し、ミシガン州の自動車労働者の平均年収は、二九年には一六〇〇ドルだったのが三二年にはわずか七〇〇〜一〇〇〇ドルにまで落ち込んだ。

この事態をうけてアメリカ共産党は、解雇に反対する世界的な抗議を呼びかけて、一九三〇年三月、デモ参加者と見物者を含めて五万人をデトロイトの市街地に集めた。市役所前では、騎馬やマシンガンを装備した警察官や私服警官など三〇〇〇名が「赤い暴徒」と対峙した。警察による暴行によってケガをした二二名が病院に搬送された。

しかし保守的な評論家によれば、失業は職のない人たちの個人的な問題で、社会問題ではない。彼らは怠惰なだけでやる気がなく、政府の失業者救済事業は「怠け者」を続けさせることでしかない、と冷淡であった。共和党出身のフーヴァー大統領は、古典派経済学とキリスト教の立場から、「わたし達の許に來たつかの間の逆境は、国民の精神的な生活を深めるはずである。栄光はまもなく訪れる」と語ったのである。

一九三二年三月七日、デトロイト失業者評議会は、フォードのリバールージュ工場への《飢餓行進 Hunger March》を企画した。失業者評議会に共産主義者が加わっていることに反応が分かれたにせよ、市民の多くは、大量解雇を進めるフォードを行進のターゲットに選択したことには満足していた。

リバールージュ工場の雰囲気は刑務所のように、労働者は会話もできず、口笛を吹くことも、座ることも禁じられていた。トイレに行くにも許可が必要で、機械にもたれかかると解雇されるかもしれない。元プロボクサーのハリー・ベネットが指揮する私設軍隊「サービス部門 Service Department」は、ミシガン州の刑務所や警察署から雇い入れた探偵や警備員などで構成されていた。労働者が一五分間の昼食の時間を数分でもオーバーしたり、職長に口答えしたり、組合の会議に出席したりすると、サービス部門のメンバーによって、路上に投げ出されてしまうのであった。フォードの労働者たちは彼らのことを「フォードのイヌ」「フォードの奴隷」と憎しみを込めて呼んだ。

三月七日の寒い朝、三〇〇〇名から五〇〇〇名のデモ参加者が西デトロイトのフォードストリートとオークウッドに集まった。アメリカ共産党に導かれた全米自動車労働組合(AWU)とデトロイト失業者評議会の元フォード従業員たちは、再雇用と労働条件の改善をフォード当局に求めた。すると群衆に向けて消防士が冷たい水を浴びせかけ、警官が催涙ガスを噴射する。群衆は石と石炭の塊を投げて応戦したのだが、突然、工場の第三ゲートが開き、警官と警備員が銃を構え、引き金を引いた。数百の弾丸が撃ち込まれ、リーダーたちが倒れ、けが人を路上に置き去りにして群衆は退散した。青年共産主義者同盟の地区組織者を含む男性四名が死亡し、非武装のデモ参加者五〇〜六〇名が負傷した。しかしサービス部門の役員も警官も裁判にかけられることはなかった。ディアボンとデトロイトの警察は共産党本部と自動車工場労働組合、いくつかの民族集会所や多数の個人宅を急襲し、共産主義者六〇名を逮捕するとともに、重傷者のうち二名を病院のべ

ッドに拘束した。

虐殺の五日後、犠牲者を悼む六万人がインターナショナルを歌いながら行進し、その歌声は町中に響き渡った。しかし失業者協議会はその後一年のうちに勢いを失ってしまう。失業者は、職が見つからなかったこと以外にも不満を抱いていたし、救済事業を積極的に進めたりベラル派の市長を『社会ファシスト』と攻撃する共産主義者によって失業者協議会が分裂状態におちいったことに失望させられたからでもあった。

一九三二年から三三年にかけてデトロイトの失業者は三〇万人に達した。六九歳となって、新しい状況に対応できず保守的になっていったヘンリー・フォードは『赤の脅威』『ユダヤ人の謀略』などといった労働者の声に耳を傾けようとはせず、UAWや産業別労働者組織委員会(CIO)の活動を一切容認しなかった。『飢餓行進』以来、ヘンリー・ベネットは八〇〇名の現役および元ギャングを核にして、元警官や元プロボクサー、元運動選手、警備員を集めた。裏の世界の気質を持った彼らの多くは直接刑務所からリクルートされた。リバーレージュ工場の労働者九万人のうち八〇〇〇名から九〇〇〇名がスパイや密告者としてサービス部門に協力していたという。

他方、UAWは他社の自動車工場で『座り込みストライキ』を敢行して成果をあげつつあった。一九三七年春、経営者も警察もこの運動に圧力をかけようとしていた。同年四月、デトロイト警察は、三七日間の座り込みストライキを強制的に終わらせた。わずか三〇分の闘いでは、保安官による催涙ガス爆弾と、ストライキ参加者による鉛の塊や錠、石、その他の小さな礫とが飛び交った。その結果、労働組合の

女性七九名と男性四一名が刑務所に送られた。

フォードでは、UAWやCIOによる攻勢に対し、ヘンリー・ベネットがヨーロッパのファシストを雇用し、リバーレージュに巨大な強制収容所を設け、恐怖と身体的暴行を加えて反撃した。従業員の二五名に一人の割合、三五〇〇名から六〇〇〇名のサービス部門は『フォードのゲシュタポ』と呼ばれた。会社に反抗心を抱いていないか、組合に関心を持っていないか、と妻が夫をスパイすることもあった。

一九三七年五月二六日、UAWのメンバー六〇名がリーフレットを工場に持ち込もうとしていた。UAWのオーガナイザーであるロバート・カンターやウォルター・リター、リチャード・フランケンティーン、J・J・ケネディたちは、サービス部門の三五名の男性によって激しい暴行を受けた。これが『陸橋の闘い (Battle of the Overpass)』と呼ばれるようになった事件であるが、このときのケガが原因でケネディは四カ月後に死亡する。

第二次世界大戦後、アメリカの好景気も一九七〇年頃を境に行き詰まるようになった³⁾。アメリカ資本主義モデルの核心であったフォードイズムが危機におちいったのは、主として二つの原因があったとされている。第一は、ある程度豊かになった労働者は、テラー主義的な単純労働を忌避するようになった。賃金上昇に生産性の上昇が追いつかず、利潤が圧縮されて、投資が減退することになったことである。第二は、消費のトレンドが規格品の大量生産が廃れ、個人の嗜好が優先する多品種生産に移行し、生産システムの変更や新製品の開発が必要になったことである。しかし配置転換や新職種への移動に労働者の協力が得られず、労使協調が崩壊し、企業も利潤圧縮のために新たな

投資が困難になったのである。

“ラストベルト”と呼ばれる地域に典型的にみられるように、没落した白人アメリカ人のミドルクラスがトランプ大統領の支持層の基盤になっている。ミドルクラスの没落——多喜二が「工場細胞」のなかでその危うさを指摘していたことにつながっているのである。「H・S工場」の専務は「自分が今迄長い間、職工たちに与えてきた「Yのフォード」としての、過分な温情はそう安々と崩されるものではない。それを信じていた。たとえ、大部分の「忘恩な」煽動者たちに幾分いゝ加減にされていても、この自分さえ其処へ姿をあらわせば、職工の全部は「忽ち」自分のもとに雪崩を打ってくるのは分りきったことだ」と思っていた。むしろ専務はこの大会を「自分のために」利用する——「H・S会社」を支配下におき、新しい重役を送り込もうとする「金菱銀行」に対して「全職工挙って反対させる」——という企みを持っていたのである。

しかし五〇〇人近くの職工が集まった「労働者大会」で、「工場委員会」の委員選挙制が決議されたことを知ると、専務は「然し「Yのフォード」はこうも脆いものか。労働者って不思議なものだ」と、労働組合の力を見くびっていた自分の無力さにかえて気づかされるのであった。多喜二は、昭和初期の日本に導入されようとしていたフォードイズムのまやかしに立ち向かう「細胞」の姿を生き活きと描き出したのである。

注

(1) オリヴィエ・ザンズ『アメリカの世紀——それはいかにして創られたか?』(有賀貞他訳、二〇〇五年六月、刀水書房一〇三頁)

(2) ヘンリー・フォード『藁のハンドル』(竹村健一訳、二〇〇二年三月、中央公論新社、二一九頁)

(3) この章は以下の文献を参考にした。

Steve Babson: *Working Detroit The Making of a Union Town*, Wayne State University Press: n edition (May 1, 1986), pp. 52-61, 92-95.

Stephen H. Norwood: *Strikebreaking and Intimidation: Mercenaries and Masculinity in Twentieth-Century America*, The University of North Carolina Press: New edition edition (May 27, 2002), pp. 171-189.

(4) 加藤哲郎・ロブ・ステイヴン編『国際論争日本型経営はポスト・フォードイズムか?』(一九九三年一〇月、窓社)を参考した。

付記 「工場細胞」の本文は、新日本出版社『小林多喜二全集』第三巻(一

九八二年九月)に拠った。

(おにし やすみつ、三重大学人文学部教授)